

吉田 徹著

## 『ミッテラン社会党の転換

——社会主義から欧州統合へ』

評者：佐伯 哲朗

本書は、著者の博士論文を加筆修正したものであり、400頁を越える重厚な大著である。内容を紹介するだけでもかなりの作業となり、評者の能力の問題により、コメントは最小限にせざるを得ない。まず、本書の構成を紹介しておこう。「まえがき」と「あとがき」を除くと本書の構成は、次のようになっている（なお、縦書きの本書の漢数字は、横書きの本稿では算用数字に書き換えた）。

序論

第1章 先行研究と本書の視角

第2章 「プログラムの政治」の生成過程

(副題：リーダーとフォロワーの相互作用)

第3章 夢——「プロジェ」の始動とリーダーシップ・スタイルの完成

第4章 挫折——モーロワ・プランの開始  
(副題：リーダーシップ・スタイルの継続)

第5章 転回——緊縮の決断 (副題：リーダーシップ・スタイルの変容)

第6章 社会主義からヨーロッパの地平へ  
(副題：新たなリーダーシップの獲得)

結論

著者の問題意識は、次のようなことである。フランスのミッテラン社会党は、ほぼ四半世紀の野党時代から抜け出し、いささか時代錯誤的ともいえる「社会主義」を掲げ、その実現の期待を背負って政権を獲得した。フランス社会主義と欧州統合と新自由主義の三者の間で生じた葛藤は、政治の場でどう捉えられ、処理されたのか。なぜ、どのようにして、そして何を目的として、フランスは社会主義から欧州統合への架橋をはかったのか。それらの点について著者は、ミッテラン大統領とフランス社会党派閥首領、そして政権獲得後のサブ・リーダーたちとの相互作用から生じるリーダーシップに焦点を据えて解明する。著者の意図としては、問題意識はジャーナリストティックなままに、手段は学術的方法に頼ったつもりであるとしている。

著者は、序論の4で「本書の構成」を説明している。この部分を援用して本書を紹介しよう。第1章では、ミッテラン社会党政権の「転回」（緊縮政策への転換を指す——評者）を扱った先行研究を批判的に検討する。第2章では、問題意識と分析の視座を展開しつつ、予備作業として70年代野党期におけるミッテランのリーダーシップと党派閥の相互作用を「プログラムの政治」と名付けて、検討する。

第3章から第5章では、社会党政権の誕生から「転回」の実現までを記述する。第3章は、81年5月のミッテランの大統領当選と続くモーロワ社共政権（評者は「内閣」と表記すべきと考える）の誕生から始まる。これはミッテランの「取引的リーダーシップ」が継続する局面であり、野党期に構想された社会党プログラムの実現過程でもある。第4章の81年第4四半期以降は、社会党の政策が行き詰まりを見せはじめると同時に、政権内のサブ・リーダーたちによる政策形成の主導権争いが先鋭化する局面である。この局面でミッテランの「取引的リーダー

シップ」は綻びはじめる。

第5章は、83年3月の「転回」が完成するまでの時期である。ミッテランの「取引的リーダーシップ」は消滅し、「変革的リーダーシップ」がとられる。しかし新たなスタイルはフォロワーたちの反乱によって完成をみることがなかった。その結果として、ミッテランは「選択操作的なリーダーシップ・スタイル」を採用して、フランスを社会主義から欧州統合へと導いた。第6章では、ミッテランのリーダーシップの変容と欧州統合のプロセスがいかなる関係にあるのかを、そして社会党の派閥政治の終焉を、いくつかの事例を挙げて観察する。

本書で1980年代初頭を少なくとも「歴史」として捉えるのは、時間が経過したためではなく、ミッテランが96年に逝去し、83年の「転回」が少なくとも間違った選択ではなかったと政治的に処理されているという判断に負っていると著者は述べる。

リーダーシップのスタイルについて著者の示す結論は、次のようなことである。ミッテランの第一局面のリーダーシップのスタイルは、野党期から第1次モーロワ内閣期まで続いた。

再生を担う社会党党首としてミッテランが最も得意としたのは、さまざまな派閥の多元性を許容しつつ、安定的環境のなかでフォロワーの目標を争点管理によって統御し、導くような「取引的リーダーシップ」であった。取引的リーダーシップの核心とは「アクターの動機に働きかけつつ、各個人の目標が異なっても、全般的に共有される原理を喚起して一体性を保つ」ことにある。アクターの動機は権力の獲得であり、共有された原理は「社会主義プロジェクト」であった。取引的リーダーシップにとっては、党構造が多面的であるからこそ、均衡点を保持しつつ求心力を発揮することが容易だった。ミッテランは、ド・ゴールに代表されるような

「ヒロイック」あるいは「救国者」的な政治を目指して、自ら環境を作り出したり、争点化して新たな「界」をつくる類の政治家ではない。しかし、第5共和制に入って新たな組織化を待っていた社会主義勢力が党内派閥として結実したことで、彼のリーダーシップ・スタイルとの融合が生じた。党内の組織的な多元性は、ミッテランのリーダーシップにとっての政治的資源へと転化した。イデオロギー的には中央に位置して覇権を確立していたミッテラン派にとって、組織的（対内的）・政党間競合（対外的）状況に応じて、党内左派と右派との循環的な連合の組換えは合理的な戦略であった。

もっとも社会党は、ミッテランのリーダーシップによる争点管理のため、欧州統合に対する確固とした方針を策定できなかった。多様な社会経済アプローチとイデオロギーを持つ派閥による競争が組織の資源として作用していたために、派閥横断的な争点である欧州統合問題で軋轢を生じさせるのは得策ではなかった。また、派閥どうしのイデオロギーの距離は、ミッテランの取引的リーダーシップの求心力を高める。だから欧州統合、広く言えば統合過程で生じる国民経済への拘束という側面について、党内で完全な一致をみることができなかった。

1981年に政権を奪取したことで、ミッテランは政策路線と派閥集団に対するコミットと離反を繰り返しつつ、共産党と社会勢力との広範な連携を実現させた功労者となった。ミッテラン大統領とモーロワ政権の誕生は、23年ぶりの左派政権という期待感と相まって、革命的な雰囲気すら醸し出した。モーロワ社共政権は、野党時代の派閥政治を受けて、きわめて急進的な政治プログラムを実行した。モーロワ内閣は、野党期の面影を強くとどめ、派閥均衡型の内閣として出発した。プロジェクト派（古代人）であるシュヴェヌマンやベレゴヴォワ、ファビウスと、

反プロジェ派（近代人）のドロールとロカールが対峙し、ミッテランに忠実なモーロワが誠実な仲介役として首相に就いた。

政権交代が実現すると、野党期に培ったミッテランのリーダーシップは行き詰まりを見せはじめる。景気の悪化と経済競争力の欠如から、プロジェ派である古代人と反プロジェ派である近代人の主導権争いが激化し、それまで権力基盤であり、資源であった派閥の均衡が崩れはじめたためである。当初、ミッテランは取引的なリーダーシップを維持するため、この均衡の変化を認めようとしなかった。リーダーシップの前提となる組織の多元性を確保するため、プロジェ路線の修正を拒否した。

しかし、すでに職位に就いていたフォロワーたちはミッテランの保守的な姿勢を認めなかった。「政策知識」を媒介として、プロジェを修正する必要性を早期に認識していた党内右派の経済財政相ドロールから首相モーロワへと、路線変更の圧力は波及していった。モーロワの反プロジェ派への転身は、ミッテランの取引的リーダーシップに大きな影響を与えた。野党時代から、党はミッテラン派がモーロワ派を介して、上部と下部を挟み込む形で統治する構造になっており、後者を支点に党内の左右勢力のバランスを保つことが覇権的安定の条件だったためである。

プロジェ路線の維持に失敗したミッテランは、第一次緊縮策である「モーロワ・プラン」を認めることになる。しかしこれはフォロワーたちが争点化した問題を、資源の振替によって処理しようとする、従来の取引的リーダーシップの継続にすぎなかった。

政権内のサブ・リーダー間でEMSをめぐる対立が先鋭化していくのもこの時期だった。プロジェ派は政権プログラムの続行を望み、これがEMS離脱という政策的選択肢の提示につながっ

た。他方の反プロジェ派は、専門家ネットワークを動員しつつ、フランス経済を構造的に強化する手段としてEMS残留を大統領に要求するようになる。

第二の局面は、「モーロワ・プラン」に続いて「ドロール・プラン」が生まれるまでである。

ミッテランが「取引的リーダーシップ」を継続しても通貨危機に象徴される経済危機は打開されなかった。ミッテランにとってこの問題は、フランス経済のパフォーマンスというよりは、自分の覇権と社会党政権にとっての初の全国選挙への影響、さらに左派政権の持続可能性という、むしろ政治的な意味合いを持っていた。市町村選挙で社会党が敗北したため、ミッテランは危機感を強めた。ここからミッテランは、緊縮策に反発したプロジェ派に加え、独自に構築した個人ネットワークを動員して、緊縮路線からの転換を図り、再度求心力を高めようとした。そこで設定された目標が、EMSからの離脱だった。離脱はミッテランが社会主義プロジェへと回帰するために設定された目標ではない。プロジェ派が推奨する政策にはEMS離脱が含まれていたが、ミッテランはプロジェそのものの貫徹を望んでいたわけではなく、「フォロワーや自身の欲求、希望、その他の動機付けによって彼らを充足させ、フォロワーの動機の根本的な構造を変革する」リーダーシップでもって政権内における地位の安定を図ろうとした。こうして、派閥の均衡を破壊した「モーロワ・プラン」が行き詰まると、ミッテランはEMS離脱を提示し、「変革的リーダーシップ」への転換を図った。

しかし、政権内ではすでにミッテランの優柔不断について、モーロワとドロールを中心に、さらに「政策知識」を媒介とした補佐官たちの反プロジェ派戦線が完成していた。経済危機の悪化と外的拘束により、プロジェ路線の貫徹はもはや許されないと認識した主流派フォロワー

たちは、EMS離脱というミッテランの新たな価値提示に従うことを拒否した。そもそも非常に多面的な組織ゆえに取引的リーダーシップが相応しかつたのだから、このミッテランの逸脱をフォロワーたちは許すはずがなかった。

83年3月に、リーダーシップ・スタイルの変化という戦略が行き詰まった。ミッテランは自らの覇権を支えてきたモーロワの離反に遭う。モーロワ首相による政策変更の受諾がなければEMS離脱は実現できない。資源として最も依存していた自派のファビウスも政策的立場を変化させた。その結果、ミッテランは緊縮策を受け入れざるを得なくなった。フォロワーたちの選好が固定化したことを知ったミッテランは、党リーダーの地位を実質的に諦めることになった。このプロセスが「転回」をもたらした。ミッテランは、政権を獲得した後の2年間に、「取引的リーダーシップ」と「変革的リーダーシップ」の両方の戦略で失敗した。この失敗こそが、その時々々の政策の変化を招いた。

第3の局面では、社会主義の失敗だけでなくミッテランのリーダーシップ戦略の破綻によって、フランスは欧州統合の次元へと引きずり込まれてゆくことになる。ミッテランは反転して、欧州統合の政治的次元をむしろ最大限に活用するようになる。それが社会主義に代わるプロジェクトとなり、自らの政治的生存を可能にするからであった。この局面で彼が採用したのは「選択的リーダーシップ」だった。この未知のリーダーシップ・スタイルは、固定的なフォロワーに依存しないために新たな次元を政治に導入し、資源配分と政治の構造を転換させていくことで確保される。この地平では、リーダーシップはフォロワーが認識する政策手段と目標の関連性を曖昧にして、レトリックによる再定義を可能にする。それは新たな次元によってどのような目標が導かれるのかが明らかでないから

である。国民国家とその枠内での大衆政治を前提とした政治が崩壊した時代において、リーダーシップが生きのびるには、欧州統合という新たな政治的次元が必要だった。多面的なアクターと政策ネットワークを配置しつつ、政党リーダーではなく国家首脳としてプロジェクトを打ち出すことのできるこの独特の空間は、ミッテランが「欧州統合の父」のイメージを残すことを可能にした。未完の政治的プロジェクトとしての欧州統合は、同時に永遠のリーダーシップを保証する。少なくとも政治家ミッテランにとって、欧州統合は自らの政治的生存を可能にする便宜的なプロジェクトであり続けた。また、国内政治と欧州政治の境界の融解は、内政で大統領としての自由度を増やす梃子となった。ミッテランが導入したこの新しい次元で、国民国家と欧州統合は分かちがたく結びつけられた。

以上が本書の構成と結論の中心部分である。本書に盛り込まれた情報や本書からうかがうことのできる著者の注いだ労力を考えれば、門外漢が何かコメントを書くことがそもそも場違いであるように思えてならない。評者にも気がつくことが全くない訳ではないが（用語の統一、カタカナ語の濫用、地名の表記など）、そのようなことはここでは大きな問題ではない。本書の特徴は、著者がドロールなど6人の重要な人物にインタビューするなど徹底して情報を収集し、ミッテランの「新たなリーダーシップの獲得」までを描ききったことにある。そのような著者に、評者は心から敬服する。本文以外に「あとがき」にも著者の人物像が垣間見え、興味深く読むことができる。

（吉田徹著『ミッテラン社会党の転換—社会主義から欧州統合へ』法政大学出版局、2008年11月刊、xi+404頁、定価4,200円）

（さへき・てつろう 法政大学社会学部兼任講師）